

一流の“叱り方”は
こうする!!

正しい叱り方と考え方
15選

～反省させる叱り方に終止符～

「“怒る”と“叱る”は全く別物で 怒るよりも叱ることが良い」

現代では当たり前前の考え方になっています。しかし、ただ叱っていれば(感情を出さなければ)いいのでしょうか。そして、**怒る**ことは絶対的に悪なのでしょうか。

この資料では、**正しい叱り方**と**正しい怒り方**について紹介していきます。



【目次】

“怒る”と“叱る”について

怒るは感情に任せています。自分が腹が立つから、怒るのです。

叱るには冷静さがあります。相手のことを考えて叱っているのです。

これは、子どもにも説明してあげると、案外役立ちます。

「先生も叱るようにするから、みんなも友達に何か厳しいことを言う時は『怒らず叱る』ことを心がけてください」と言うように。

でも、怒ってはいけないからと言うと、そうでもありません。

人間の生身の感情を伝えると言う点では、**必要な場面では怒ることも大切**です。

ただし、学級経営が恐怖政治になってしまったり、度を越して体罰と判断されるような言動になってしまったりすることには気をつけなければなりません。

正しい

叱り方・考え方

10選

1 さっぱり叱る

これは大原則です。ネチネチやられると、子どももしんどいです。

相手のためを思って叱っているというメッセージを言語・非言語で伝えることが必要です。

2 表情は百面相で

同じ叱るにしても様々な度合いがあります。声質・表情のバリエーションを意識します。

ある先輩教員が「さっきまで笑っていたのに表情を180度変えて怒りを表す」という職員芸を見せてくれました。

「教師の表情は芸の内」と教えてくれました。

3 叱ったらフォロー

叱った後の子どもの様子はしっかり観察しておきましょう。反省して行動の変化が見られたら褒めることも忘れずに。

叱られるとただ凹んでいるだけの子どももいます。そんな子どもであれば、叱った後には挽回をするチャンスです。

意識的に教師が作ってあげることも必要です。

4 叱り方の基準を示す

早いうちに教師がどんな時に叱るのか、なぜ叱るかを宣言しておきます。私は次のように言います。

- ① 友達や自分の体を傷付ける場合
- ② 友達や自分の心を傷付ける場合
- ③ 周りの人に迷惑をかけるような場合
- ④ 法律違反をしているような場合

5 叱った自分にも反省点

指導が悪いから叱らなくてはならないはめになったのだ。という自責の念をもっておきましょう。

場合によっては

「先生もここは反省からあなたも変わってください」と自分の非を認めることも必要です。

6 黙る

例えば、授業中のざわつきがおさまらない時は教師が黙って」しまうというのもメッセージの出し方です。

ただし、黙って子どもに無視されているようではどうにもなりません。

7 怒鳴る

怒鳴るは三流です。ですが、怒鳴らざるを得ない場面もあります。

本当にいけないことをしたのだということが伝わるように効果的に怒鳴りましょう。ずっと怒鳴っていると子どもも慣れます。怒鳴った限りは、徹底して行動を改めさせなければなりません。

8 下手な脅しは使わない

「強く叱られたのであるが、特にペナルティーもないし・・・あれはただの脅しだったのか。」

と、子どもに思われてしまうのはまずいです。

昔はよく「帰れ！」と言われたものですが、それを言うとな本当に帰ってしまう場合が続出しかねません。

「帰れ！」＝「強く反省しなさい」
というようには取ってくれません。

9 叱られたことを納得させる

子どもは叱られても何を叱られたかさえわかっていない場合があります。

「なぜ叱ったか」

「叱ったのはあなたのことを思って叱っている」

「こうすればよい」

ということはしっかりと理解・納得させましょう。。

10 早い時点で叱る①

悪い行いを叱らずにさんざん見逃しておいて叱ると子どもたちにすれば

「何で今まで何も言わなかったくせに」

「何で私がやったときだけ」

という気持ちになります。

そしてそれを

子どもが口に出して指摘し始めると一気に教師は苦境に立つことになります。

11 早い時点で叱る②

ぼっとしてしている教師は早い時点で叱ることが苦手です。ついつい見逃してしまい

「この先生は甘い」と思われてしまいます。
自分の中に、学級を成り立たせるための善悪の基準をはっきり持っておき"何がポイントなのか"の見極めが重要です。

12 叱ったことを共有

延々と個人を叱っていてもモグラ叩き状態になって叱ってばかりいる自分につかれてしまいます。A君を叱ったときに

「こんな事があってA君をしかったのだけれどみんなはどう思いますか。先生はこういう場合はこんな対処をします」というようにルールを共有するきっかけにするといいです。

13 泳がせると叱る

前記の「早い時点で」とは逆の手もあります。

ある程度の失敗をさせることも時には必要です。

失敗経験をさせて自分でその原因や解決方法を考えさせるというのも時には大切です。

ただし、泳がせすぎは危険です。

14 追い詰めすぎない

叱られても本人にはどうしようもない場合もあります。特に発達障害を抱えている子どもは

「それはだめ」と言われてもすぐに自分を変えることができません。

「いつまでに、どう変わればいいのか」というある程度の余裕や見通しを示してあげるのもよいです。

15 諭す

怒る・叱るという表現の他に"諭す"もあります。それぞれの違いについての正確な比較分類は学者さんに任せてニュアンスとして"叱るのではなく諭す"という心持で接するのもいいです。語気を強めず自分（たち）のどこがいけなかったのかどうするべきだったのかを自分（たち）で考え明日からの行動の変容を促す…というのが"諭す"のイメージです。

毎回、"諭す"で通す必要はありませんが、場面に応じて指導する側が心持ちを柔軟に冷静にコントロールできるようにしたいものです。

ここまで、10の叱り方を紹介しました。

根本にもっていてほしいのは『感情的になったら負け』
マインドです。

最初に書いたように、いかに冷静でいられるかが子ども
の成長に直結します。

また、子どもの実態や場面に応じて臨機応変な叱り方
をしていきましょう。